

接続詞を捨てる

奈良 敏行（笈の定有）

定有堂事務局の目と鼻の先に SHEEPSHEEP BOOKS がある。先日、数少ない新刊コーナーに、つまり選りすぐりの一角に、岩波新書『ケアと編集』が数冊も面陳してあった。医学書院「ケアをひらく」シリーズの名編集者、白石正明さんの退職後の本なので、迷うことなく購入した。

退職にあたって『精神看護三月号』（2024）に、二十五年間担当してきたこのシリーズ四十三冊の総まとめ解説を掲載している。一貫した思想は「視点が変わるとすべてが変わる」という発見だった。

とくにわたしの心に残ったのは、「なるべく接続詞は落としてました」という一言だった。

《接続詞を外すと文と文との間にスペースが生まれる。そこを読者が読み込むんですね。スペースがあるからこそ、読者が入り込めるというメカニズムをそのとき知りました。》

そのときというのは、ALS（筋萎縮性側索硬化症）的

日常を描き、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『逝かない身体』を編集したときの気づきだ。

接続詞の役割は普通「先行する語や文節・文を受けて後続する語や文節・文に言いつけ、それらのものの関係を示すはたらきをもつ語」（デジタル大辞林）と説明される。例えて言えば道路標識のようなものだろうか。明快な文章は一足早くつながりの予測を大事にする。白石正明さんの真骨頂は、接続詞を捨てるという一事に集約されるのかと感動し、それからわたしもなるべく省くように心がけた（あ、「それから」は不要か）。

『ケアと編集』でもこの信念は展開されるのかなと、頁をめくるのを楽しみにした。「接続詞はドアを閉める」という小見出しがあった。やはり『逝かない身体』のところで語られる。

《接続詞なんていうものは、うまくつながっていない文章を無理やり意味ありげに見せるときこそ必要なものかもしれない。》

「説明文なら接続詞は多くなる」、しかし『逝かない身体』は説明文でない。

《最後は言葉抜ききの身体的な交わりを、常識の外で開拓していく姿を描写する書物である。それは説明ではなく、究極の関係を「体験」するための本なのだ。》

《文と文とのあいだが緩いと、すきまに入ることができ
る。(略)それが文章を体験するということだ。》

『ケアと編集』は「ケア」に学んだ編集術という主題の
本だ。具体的には「浦河べてるの家」ソーシャルワーカー、
向谷地正良さん、そして『リハビリの夜』の著者熊谷晋一
郎さんに教わる。熊谷さんは脳性まひでありながら小児科
医、同時に当事者研究の学者でもある。

《小さい頃から自分の身体や自分を取り巻く世界が把握
できなくて、ずっとその感覚や思いを語る言葉を持てず
に、不安と恐怖のなかを生きてきたあなたに》

という書き出しの綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作
法』を定有堂では一つの入口として展開してきた。入口と
は、多数派と少数派の常識が入れ替る、世界の扉のことだ。
分かるとは自分のモノサシで計ることだ。一歩進めてモ
ノサシが違えば分かるものも分からなくなる。本を読むと
はそういうことではないかということの形にしてみる。秩
序との反転、そこには目眩のするような読書の楽しみがあ
る。たぐさんのモノサシに出合うところに読書が導く「自
由」の体験がある。

本屋である定有堂は『つながりの作法』を入口とする。
編集者である白石正明さんは、結局「接続詞を捨てる」と
いう発見を「ケアをひらく」という大シリーズの入口にし

たのではないかと想像してみた。

白石さんは横道誠著・村中尚人解説の『海球小説』やニ
ーンプル・グランディン『動物感覚』もこの本の中で勧め
ている。前者は発達障害者が多数派の星「海球」の物語だ。
後者は中井久夫さんに教わった本だと紹介する。そこでは
「言語によって世界は簡略化され、粹付けら」れていく。
人間というモノサシが反語的に変容するのだ。すでに入手
したが、いずれゆくり読んでみたい本だと思った。

2025. 04. 28

(参考)

白石正明『ケアと編集』岩波新書 2025

『精神看護三月号』医学書院 2024

川口有美子『逝かない身体』医学書院 2009

熊谷晋一郎『リハビリの夜』医学書院 2009

綾屋紗月・熊谷晋一郎『つながりの作法』NHK新書 2010

テンブル・グランディン・キャサリン・ジョンソン『動物感覚』N

HK出版 2006

